＜地域経済の現場から＞

「日本一住みよい街、栗東」

野下俊晴

◆はじめに

６月初めごろだっただろうか。朝、職場でなにげなくテレビを見ていた。みのもんた氏が司会をしていたから、毎日テレビの「朝ズバッ！」だったと思う。

…つい先日、日本の“住みよい街ランキング”いうのが発表されたんですよ

と、いうような内容のことを言いつつ、上位へ向かって発表していくみの氏。３位が成田市（千葉県）、２位が福井市（福井県）。そして、１位。

…栗東市。滋賀県、ですね

ゲストの反応は「ふーん（栗東？知らないねえ）」という、寒い反応だった記憶がある。

栗東。“りっとう”読む。日本中央競馬会（ＪＲＡ）のトレーニングセンター（以下、トレセンと略す）があるため、競馬ファンにはなじみの深い地名だが、競馬と縁のない人や、県外在住の人には、あまり知られていないのではないだろうか。

中央競馬担当の記者をしていて、ここ５年ほどほぼ毎週、この街に出張している。月の３分の１ほどの時間を、この街で過ごす。しかし、日本でもっとも住みよい街に選ばれるとは、思いもよらなかった。“琵琶湖から少し離れたところにある、内陸の田舎町”という印象しかなく、正直、びっくりした。

◆住みよさランキング

前述のランキングは、東洋経済新報社が毎年行っている「住みよさランキング」というもので、今年で 13 回目。今年５月 30 日現在の全国の市町村 741 市（740 市と東京区部全域）が対象で、下記の５つの観点から偏差値を算出し、ランク付けしている。

①安心度（人口当たりの病床数、65 歳以上人口当たりの介護保険施設定員数、15～49 歳女性人口当たりの出生数）

②利便度（小売業年間販売額、大型小売店店舗面積、金融機関数。いずれも人口当たり）

③快適度（公共下水道・合併浄化槽普及率、人口当たりの都市公園面積、転入・転出人口比率、世帯当たりの新設住宅着工戸数）

④富裕度（財政力指数、人口当たりの地方税収入額、納税義務者１人当たりの課税対象所得）

⑤住居水準充実度（世帯当たりの住宅延べ床面積、持ち家世帯比率、住宅地平均地価）

栗東市は財政力指数、地方税収入額が高いのが特徴。出生数、転入・転出人口比率や新設住宅着工戸数が高いのも、注目に値する。これらのことから、裕福な住民が多く、子供と住宅が増加中であることが分かる。“成長力のある街”いうイメージが浮かび上がってくる。

一方でこのランキングには、交通網の整備状況や文化施設の多さなどの観点がなく、その点には限界も感じる。市内に鉄道や市バスなどの交通網が整備されていること、映画館や美術館、博物館があることなどは、住みやすさの大きな要因となるはずだ。１位になったとはいえ、あくまでも上記の指標から見た場合、と考えなければならない。

ところで、栗東市とは実際にはどんな街なのだろうか。

◆栗東市の歴史と現在

栗東市は滋賀県の南部に位置し、南北に細長い形をしている。面積は約 52 ㎢。人口は、平成 15 年の段階で約 58,000 人となっている。

市内には80基ほどの古墳があり、出土品からは（仮に畿内にあったとすれば）邪馬台国との関連が強かったと地域と推測されている。近世以降は、東海道と中山道の分岐点という交通の要衝にあって、人の往来が絶えない地域だった。野洲川の扇状地の一部にあるという特性を生かし、古くから稲作が盛んに行われてきた。

昭和 29 年 10 月に治田村、大宝村、葉山村、金勝村の４村が合併して、人口 15,426 人の栗東町が誕生する。栗太郡の東方にあったため、“栗東”いう名がついた。

農村だった栗東町は、昭和 30 年代から街道筋にあることを生かして、飛躍的な発展を始める。町内には国道１号、８号、名神高速道路が通っていて、同３８年には、名神高速栗東インターチェンジが営業を開始。これをきっかけに企業の進出が始まり、同時に宅地開発も進んだ。現在、国道１、８号線周辺には郊外型の大規模小売店とともに積水化学、日清食品、松下電工などの工場があり、名神沿いには三菱重工業の工場もある。

平成３年には、ＪＲ栗東駅が開業。同８年には住民基本台帳人口が５万人を突破。同 13 年 10 月１日に、単独で市制を施行し、県内８番目の市となった。

工業都市としての側面もあるが、京都からＪＲで約 30 分、大阪からでも約１時間という距離にあることから、京阪地域のベッドタウンの色合いが強い。夜、大阪から野洲、米原方面行きの新快速に乗ると、

滋賀県のこの地域まで帰宅するサラリーマンがかなり多いことが分かる。東海道新幹線の新駅（仮称・びわこ栗東駅）設置も決まっていて、ベッドタウンとしての性格は今後、ますます強くなっていくと予想されている。

◆競馬の街・栗東

とはいえ、やはり栗東といえばトレセンの街である。昭和６年、治田村に県内初の常設競馬場ができたことは、のちにＪＲＡが世界に誇る大調教施設を誘致したことと無縁ではないように思えてならない。

昭和29年、日本中央競馬会が発足。当初、同会所属の競走馬は各競馬場で調教を行っていて、調教師を筆頭とする厩舎スタッフも各競馬場周辺に住んでいた。しかし、競馬の発展と競馬場周辺の宅地開発、自動車の普及などに伴い、調教専門の広大な施設＝トレセンが必要となってきた。関西の場合、阪神、京都、中京の各競馬場へ交通の便がよく、気候が馬の飼育に適切で、150万㎡級の広大な土地が確保できること。この３点を条件に、日本中央競馬会は、昭和30年代半ばから候補地を探していたが、このときにちょうど合致する条件を抱えていたのが、栗東町だった。

栗東ＩＣの開設に際して、町はＩＣに近い町南部（金勝地区）の開発を考えていた。奇遇というほどのタイミングである。日本中央競馬会がトレセンの建設地を探していることを知った同町はトレセンの誘致に乗り出し、同40年には正式に建設が決定した。

敷地面積約143万㎡、約1,200世帯4,000人、2,000頭以上の競走馬が暮らすトレセンが開設したのは、同44年。人口約17,600人の町に、一気にこれだけの住民が増え、しかもそのうち百数十人（調教師及びリーディング上位の騎手）は、一般社会で言うところの“社長クラス”の収入を誇るのだから、町政に与えるインパクトが絶大だったのは想像に難くない。

個人町民税で見るとこの点は明白だ。トレセン開設前の昭和40年度は約3,150万円だったが、開設後の同45年度には約8,950万円と倍増。さらに同48年度には約２億8,860万円、同49年度には約４億2,700万円と急激に増加していく。栗東が“裕福な街”になった大きな要因の一つに、トレセンの誘致があったことは否定できない事実だ。

ちなみに、人口も昭和43年（18,122人）から同49年（31,635人）にかけて急増。同町の人口がこれほど増えた時期は、手元にある資料を見た限りでは、他にない。

ただ、トレセンの開設は町史の一つのヤマ場で、裕福な街になる下地にはなったと思うが、それが栗東という街全体を飛躍的に発展させる原動力となったかというと、疑問符がつく。同市の人口はその後も着実に増加を続けていて、近年では平成11年から毎年、約500世帯ずつ増加している。トレセン関係者ばかりで増えているとは思えないペースだ。昭和50年以降の発展は“トレセン効果”というよりも、むしろ工業都市として、京阪地域のベッドタウンとしての発展と考えた方が、しっくりくる。

◆栗東は日本一住みよいか

実際に歩いてみた印象では、同市内は大企業の工場や大規模小売店が立ち並ぶ国道１号線沿いの北部、市役所などがある落ち着いた住宅地の中部、トレセンがある南部の３地区に大きく分けられるように思う。

南部に行くほど自然が多く残っており、特に名神高速道路を越えると、のどかな農村風景があちらこちらに見受けられる。トレセンの周辺は“まさに田舎”といった趣で、夏になれば街灯にカブトムシが飛んでくるし、日中に野生のタヌキを見かけることもある。空気のおいしさは、ほこりっぽい大阪とは比べ物にもならず、毎週、栗東に行くたびに、あの空気のよさはうらやましく思う。

ただ、出張している身分ということもあって、住みよさを感じることはまったくない。むしろ、交通の面では不便を感じる。トレセンのある地域が市の中心部から離れているせいで、車がなければどこにも行けない。市電もないし、バスの便数も少ない。大阪や京都に出るにはＪＲしか手段がなく、人身事故（頻繁に起きる）でＪＲがストップすると、非常に困る。生活、通勤ともに車を使わない人は、どうしているのだろうかと、ときどき不思議に思うことがある。

物価が特別安いとも思えず、気候も京都と似たり寄ったりで特に過ごしやすいわけではない。この原稿を書くために市立図書館に何度か足を運び、検索端末の使いやすさなどに居心地のよさは感じたものの、大阪に比べれば、やはり規模の小ささは否めない。町並みに趣があるわけでもない。実際に住んでみれば住みよいのかもしれないが、少なくとも「住んでみたい」という魅力がある街ではない。

万人にとって“住みよい”という感覚は、ありえない。その人の置かれた状況によって、その感覚は

変わるはずだ。京都市周辺で働いていて、車で通勤し、空気のきれいな田舎で暮らしたいと思っている人には、栗東は魅力的な街だろう。しかし、大阪に住んでいて、電車と自転車を移動の主な手段としていて、ある程度の都会に住みたいと思っている現在の私には、とても住みよいとは言えない。

ちなみに、このランキングで京都市は 153 位だった。北海道の苫小牧市と同位である。苫小牧市には住んだことがないが、少なくとも私が青春の一時期を過ごし、今でも愛している街・京都が、神戸市（137 位）はともかく、栗東よりも住みよくないというのは心外である。

限界のあるデータとは百も承知なので、当初、この原稿はもっと別の方向でオチをつけるつもりでいた。が、やはり、このオチで終わらざるをえないだろう。

「栗東市が日本で一番住みよいだなんて、腑に落ちない！」

＜参考文献＞

・東洋経済新報社『都市データパック 2005 年度版』2005 年
・栗東町総務部企画課編『栗東町統計書　昭和 53 年度版』1979 年
・栗東市政策推進部政策推進課編『栗東市統計書　平成 15 年度版』2004 年
・栗東市企画部編『栗東市誕生の記録』2002 年
・中央競馬ピーアール・センター編『栗東トレーニングセンター20 年史』1989 年
・栗東町編『栗東の歴史年表』1986 年

◈補記

栗東が日本一、住みよい街と報道されてから数日、トレセン内でも何度かこの話題が取り上げられた。調教師の先生方は「なんでそんなことになるのかね。まあ、これだけ“社長”がたくさん住んでいるんだから、税収は多いわなあ」。実際のところ、「住みよい」という意見が圧倒的で、それは「特に不便を感じないし、京都に行くのにも近いから」という意見が多かった。職住が“超”のつくほど近接していて、自動車を主な移動手段としているために、そう思うのだろう。

トヨタ自動車で働いている大学時代の先輩に、「栗東は近畿でもっとも外国製自動車の所有率が高い街」と聞いたことがある。うーん、やはり金持ちの街なんだなあ…。

（サンケイスポーツ・記者）